

国指定史跡 谷戸城跡を探る

1. 谷戸城をとりまく環境

谷戸城跡の概要

谷戸城跡は城山あるいは茶白山とも呼ばれ、甲斐源氏の祖、逸見黒源太清光（1110～1168?）の居城と伝えられる。城は天然の堀である東衣川・西衣川に挟まれた、周囲との比高差 30mの眺望に優れた独立丘に築かれている。城内は大まかに6つの郭（＝平場）と帯郭（＝細長い郭）に分けられ、一の郭を中心に北・東・西に郭を配する「輪郭式」と呼ばれる縄張り（＝各施設の配置）を持つ。北西から西斜面には帯郭を、急斜面となる南側には狭い通路をそれぞれ数段設けているほか、北～東にかけては空堀と土塁によって防御を固めている。

地理的・歴史的環境

谷戸城のある北杜市大泉町周辺は、台上とよばれる八ヶ岳南麓の台地上に位置している。地形は南に面した緩傾斜地が続き、八ヶ岳の湧水を源とする小河川が発達している。

平安時代には辺境の地であり、9世紀になるまでほとんど人は住み着かなかった地域である。9世紀以後、急速に人口が増え、和名抄には巨摩郡9郷の中に速見郷の名前が記載されるほどになるが、これは御牧（朝廷直轄の馬の飼育場）が設置されたことが大きな要因と考えられている。

義清・清光の配流

義光は常陸国に進出し、平氏と姻戚関係を結んで義業を佐竹郷に、義清を武田郷に配置

→ 武田刑部三郎義清

義光死後、清光が姻戚関係にある吉田氏、鹿島社大禰宜の領地を侵し朝廷に訴えられる大治五年（1130）、義清・清光が「濫行」により甲斐国市河庄に配流後、勢力を伸ばす

→ 罪人であるが、「武家の棟梁源氏」というイメージが土着を成功させた要因か？

義光と同じく、姻戚関係によって甲斐国内に勢力を伸ばしたのか？ → 在地勢力は不明

清光は伝承の分布と名字からも北巨摩地域（台上）に勢力を扶植した可能性が高い

→ 官牧（穂坂・真衣・柏前）の存在と開発の余地が残る土地だったためか？

甲斐国内の伝承

『甲斐国志』に記載されている北杜市内の寺社・城館のうち、義光・義清・清光の伝承をもつ場所を抜き出すと以下ようになる。

義光・義清

若神子城・諏訪明神・三輪明神・陽谷山正覚寺・久栄山妙円寺・湯沢山長泉寺（いずれも若神子）、津金山海岸寺（津金）、金滝山信光寺（東向）、白龍山徳泉寺（比志、ここまで須玉町）、八幡宮（上黒沢）、孤月山浄光寺（蔵原、ここまで高根町）

清光

谷戸城・逸見神社（いずれも大泉町谷戸）、源太ヶ城跡（津金）、中尾塁跡（小倉、ここまで須玉町）、中丸の旧塁（長坂町中丸）、建岡神社・朝陽山清光寺（ともに長坂町大八田）

義光・義清は寺社の建立や祈願所としての伝承が多く、特に義光の伝承が圧倒的に多い。おそらく義光は県内各地に伝承が残っており、後三年の役で官職を辞して兄を助けた美談から人気が高い武将であり、強い武将としても有名であったからと考えられる。

義清は義光に比べて伝承地が少なく、影がうすい。義清の本拠は市河荘であり、平塩の岡（市川大門町）や義清神社（昭和町）の伝承のほうが具体性がある。

清光の場合、寺社の伝承が極端に減り、実戦的な施設の伝承が増えている。伝承地は大泉・長坂と須玉に集中し、それぞれに本拠となる城がある。現段階の研究では、中尾城・源太ヶ城（ともに須玉町）の清光伝承には懐疑的である。しかし、系図には清光の長子光長を小藤太郎と書くものがあり、須玉町城での伝承も根強い。

2. 谷戸城の調査

谷戸城に関する記録

『吾妻鑑』治承4年9月15日条・・・武田信義・一条忠頼が「逸見山」にて北条時政と
(1180) 会見。この「逸見山」に比定されている。

『高白斎記』天文17年(1548)9月6日条・・・「矢戸御陣所」(谷戸御陣所)の記述。
『甲斐国志』・・・土塁・堀の残りが良いことから、天正10年(1582)のいわゆる天正壬午の戦いの際に修築されたものと推測し、「逸見山」も交通の要衝である須玉町若神子にあったとしている。

→ このように確実に谷戸城の歴史を伝える記録は現在まで確認されていない。

戦国時代までの山城

『平家物語』 「・・・路を掘りきって堀ほり、搔掻かき、逆茂木ひいて待ちかけ・・・」

14世紀代(南北朝時代)に多数出現

『太平記』 笠置山城「・・・岩を切て堀とし、(中略)木戸なる橋より矢間の枝をおし・・・」
南北朝期の記録が残る山城を調査しても、遺構・遺物が出土しない場合が多い

→ 後世に破壊されたばかりではなく、遺構として残らない施設だったのではないか

有事の際に立て籠もるだけの場であり、恒常的な軍事施設ではない
郭（くるわ）の削平が甘く、堀切は浅い、全体の縄張りのまとまりが粗雑

谷戸城跡から出土する中世遺物

谷戸城からはカララケ、内耳土器（内側に紐をとおす耳の付いた土鍋）、御皿、石臼、茶臼などが出土しており、陶器の製作年代は1380～1460年頃（14世紀後半～15世紀前半）とされる。出土地点は一～三の郭に集中する傾向があるが、中世の遺構に伴って出土するものはほとんどない。

炭化材の年代測定

年代	11世紀	12	13	14前半	14後半	15前半	15後半	16	17	18	その他
点数	2	1	4	7	8	9	7	5	0	3	17

谷戸城では遺構に伴う遺物が少ないため、出土炭化材の年代測定を積極的に行っている。一の郭では14世紀前半と15世紀の値を示すものが多く、空堀地業層の直下では14世紀後半に集中する傾向がある。16世紀の炭化材は二の郭の空堀覆土中より1点、帯郭東側の溝状遺構に重複するピット覆土中より1点、五の郭の表土直下より3点であった。

調査結果

- ・遺物の出土が少ないことから、生活の場ではなかった。 → 臨時の軍事施設
- ・現在見られる遺構は14～15世紀のものである可能性が高い
- ・土塁の下の堀のような痕跡、斜面造成のやり直し、空堀の埋め戻しなどから城の改修が行われたことは確実だが、基本的な縄張りは変わっていない。
- ・後世の改修により、清光時代の遺構は残っていない可能性が高い。

3. 逸見氏の動向と谷戸城

光長系逸見氏

逸見氏は清光を祖とする一族で、嫡子太郎光長が受け継ぐ。 → 本来であれば嫡流
しかし、実質的にはもう一人の太郎である武田信義が甲斐源氏の棟領として振舞い、平家討伐後は武田家が甲斐守護を継承していく。

逸見光長については、平家討伐に参加していたようだが、活躍は伝えられていない。

→ 本拠逸見山を守るために残ったか？

承久の乱（1221）では、光長の孫惟義とその子義重が東山道軍の一員として活躍し、義

重は美濃国大桑郷に所領を得たほか、乱を契機に他国へ出て行く逸見氏がいた。

有義系逸見氏

武田信義の子であるが、逸見有義と記される。信義の嫡子忠頼が謀殺されてからは、武田有義となることから、この時点で武田家の惣領となったと考えられる。

→ 出身は逸見氏だが、甲斐源氏弱体化を狙う頼朝により武田家を継がされた？

梶原景時の謀反発覚時に失踪。おそらくは石和信光により謀殺され、信光が惣領。

子孫は県内各地を本拠としたが、その中の一人と考えられる逸見有直は、逸見の地を領し、守護職を奪うため武田氏と戦った。

15世紀の甲斐国

1333 鎌倉幕府滅亡 → 南北朝時代

1350 観応の擾乱 → 高師冬、逸見孫六入道、須沢城にて自害

1392 室町幕府により全国統一

1416 上杉禅秀の乱

前関東管領上杉禅秀が鎌倉公方足利持氏に対して起こした反乱。甲斐守護武田信満は娘が禅秀に嫁いでいた関係から禅秀に加担したが、1417年、鎌倉府により追討され、自害した。

→ 甲斐国は逸見有直の支配下になり、信満の弟信元、信満の子信重が守護に任命されたが、甲斐国に入ることができなかった

1417～逸見有直と武田信長による抗争

『鎌倉大草紙』

元々は西郡の地を領していた逸見氏だが、武田氏に押されて「名字の地計知行」する状態になってしまった。逸見有直はどうにかして武田氏から守護の地位を奪おうと考え、公方足利持氏に取り入っていた。

「武田一本系図」裏書

信長は国に留まり、親類・家臣を集めて、逸見村山の者達と十余年にわたり戦を行った。親子・兄弟が敵味方に入り乱れる状態で、一日に十度二十度と戦うことも度々であった。最後は信長が勝ち、逸見の者達を多く討った。

1467～応仁の乱 信州勢が頻繁に侵入

1477 『王代記』文明四年

「・・・信野勢甲州へ乱入す。・・・ヲハ子の城にて逸見一門皆切腹。

逸見三十一才。」

このように武田氏との抗争や信濃からの侵入といった戦が頻発した社会情勢の中、逸見氏の城として谷戸城も使用されたと考えられる。